

来たるべき社会のための覚え書
—〈存在の連鎖〉の持つ意味—
Notes for the Society to Come
A Meaning of the Idea 'Chain of Being'

木下 康光

KINOSHITA, Yasumitsu

3.11とはいったい何であったのか、まずそこから議論を出発させねばならないだろう。2011年3月11日東北地方太平洋岸を襲った巨大地震と大津波による東京電力福島第一原子力発電所原子炉の深刻な炉心溶融事故は、我々がいま人類史の新たな分岐点に立っていることを明らかにした。そのことの痛切な認識なくして人類の存続はないであろう。

原子力発電が始まったとき、それは人類の第二のプロメテウスの火と呼ばれた。これによって人類はその歴史の始まりに火を得たのに匹敵する新たな段階に達したと喧伝されたのだった。それはバイオテクノロジー同様、自然を思いのままに操る神にも等しい人類進歩の輝かしい成果であった（はずだった）。だが3.11フクシマ事故は神ならぬ身の知るよしもなし、「想定外」の自然災害（実は人災）によって、近代科学の驕りは木端微塵に打ち砕かれ、最先端技術の未熟さが白日の下にさらけ出されたのだった。人類最高の知恵は猿知恵にすぎなかったことを手酷い仕方で思い知らされたのだった、お釈迦様の掌の中の孫悟空のように。あるいはゲーテのバラード『魔法使いの弟子』の未熟な弟子のように。夢の核技術はまさに魔法だった。そして未熟な弟子の魔法の知識は所詮みようみまねの上っ面だけのもので、ついにこの怪物の暴走を制御できず、大惨事を

引き起こしてしまったのだった⁽¹⁾。

そもそこの核技術なるものは、よく知られるように大量殺戮のための軍事技術として開発されたものだった。だがそれはやがて国際関係の変化に伴い「平和利用」の名のもと、巨大なエネルギーを供給する原子力発電として利用されるようになり、増大する一方の経済活動を支える根幹的なエネルギー源として位置づけられていったのだった。石炭・石油などの化石燃料によるエネルギー資源の枯渇が懸念される中、核融合の可能性まで語られる原子力の将来にどれほど大きな期待が寄せられ、もてはやされたか、いまさら言うまでもあるまい。

その際未来のエネルギーとして原発を推進したのは、エネルギーの高消費こそが生活水準の高さにほかならず、そしてそれが豊かな生活というものであり、幸福にほかならない、とするイデオロギーであった。そして原発は快適で便利な大量消費文明を担うエースであった。だが、豊かさとは何かが問われ、人間が本当に求めているのは物質的豊かさではなく、生の究極の目標は幸福にあること、GDPの大きさは幸福度と必ずしも関連しないことが明らかになると、上に述べた物質的豊かさイコール幸福とする消費文明のイデオロギーは支配体制たる資本主義の宣伝、トリックにすぎないことが露呈したのである。今日

の消費文明は人々の欲望の必然的結果であろうか。必要は発明の母というけれど、今日の新技術、新商品の多くは内発的な消費者の求めによるよりも、むしろ企業側が積極的・能動的に消費者に働きかけ、その欲望を呼び覚まそうとして生まれたものであることは周知の事実であろう（東京 - 名古屋間を 40 分で結ぶというリニア新幹線構想などは一体どこに必要があるだろうか。進歩の名のもと次々に生まれるこのような巨大プロジェクトは大手ゼネコンなど大企業・大資本の存続のために必要であるに過ぎない）。その結果生じる事態と言え、資本の増殖と環境破壊だけである。そしてまた地球資源の枯渇によって将来世代の生活の資が奪い取られることになることは今さら言うまでもあるまい。

*

資本主義の完成（＝最終）段階とも言えるグローバル資本主義の時代にあつては国家・社会の役割はますます低下し、貧富の差が拡大して格差社会が生まれることになった。社会全体の利益より個人の利益を尊重し、個人の自由を最大限実現しようとする自由主義経済体制のもとでは、競争は社会進化の動因として肯定・奨励された結果、個人間の格差の拡大は必然の成り行きだった。経済成長のもたらす富は国民の 1 パーセントに満たぬと言われる富裕層にますます集中する一方、効率化の追求により非正規雇用が増大し、それによって低所得者層が急激に増加しているのは現在我々が目にしている世の姿である。真面目に働きさえすればいつか小さな家の一軒も持てると信じられた時代は束の間のことだった。それどころか国家財政の収支の悪化による福祉縮小（切り捨て）政策の中で、豊かな先進国の一つとさ

れるこの日本で、生活苦による自殺や、電気やガスを止められての餓死といった悲惨なニュースが後を絶たないのである。

資本主義は近代科学とともに近代の主要な原動力であった。そこでは個人の自由の拡大と引き換えに、共同体の崩壊が進んでいった。家、親族、村などの共同体がセーフティーネットの役割を果たした以上に束縛と感じられた限りは、近代の歴史は個人にとって解放の歴史であった。封建制度の束縛に苦しむ、貴族と聖職者以外の大多数の人々、とりわけ市民階級にとって、資本主義的な自由は解放を約束するものとしてまさに歓迎すべきものであり、暗黒の中世に対して明るい近代を謳う進歩思想が広がったのだった。理性の力を信奉する啓蒙主義が生まれたのもこのような歴史的文脈においてであった。だが生産力が増大する中で資本を蓄積したブルジョワジーが覇権を確立するや、支配体制となった資本主義・自由主義は自らを脅かすもの、とりわけ社会主義や共産主義の思想に対して警戒を強め、敵対するようになった。それが 1989 年までの状況であった。そしてこの年以降の世界政治の一連の出来事は、まさに資本主義が最終的勝利を収めたかのように見えるものだった。そのような状況の中で生まれたのが経済のグローバル化という新たな事態であった。そこでは資本の自由こそが最高善で、企業活動の自由が最大限認められるべきとされ、そのためには、TPP 加盟交渉でも明らかなように、国家主権さえ制限されるのである。我々はそのような歴史の新たな段階に生きているのである。

国家は擬制された共同体とはいえ、近代に入って村は破れ、家族の崩壊が進行する中で、最後のセーフティーネットとしての社会的役割を期待されていた。国家がその役割を果たせないとなると、人間

社会の存続そのものが危ういことになってくる。

*

人間の本質規定として言語や道具の使用などが指標として挙げられるが、それらにもまして挙げられるべきは社会性であろう。採集と狩猟に依存して生きていた太古の人類は、自分たちより大きくて強力な、あるいは運動能力に勝った熊や象、鹿や猪などの獲物を得るためには協働によるほかなかった。そしてこの協働を通して言語というコミュニケーション能力が発達したのだとされる。すなわち人間固有の弱さが社会性（と知能）を育んだのだった。

人間は基本的、本質的に社会的動物なのである。それは具体的にはどういうことなのか。それは端的に言えば、人間社会の最小単位である家族にせよ、血縁親族にせよ、あるいは地域共同体にせよ、あるいはまた様々な社会集団であれ、その成員をひとりとして飢えさせないということではなければならないだろう。伝統的な共同体的社会では肉体や精神にハンディを負って生まれた者にも彼らに相応の仕事と役割、居場所が与えられ、生存の機会が保障されたのだった。その意味で今日の冷酷な切り捨て政策は社会性の放棄であり、人間の本性に悖るものと言わねばなるまい。

近代は個人の自由が最大限尊重されその欲望の実現を図る、基本的にエゴイスティックな社会である。その傾向が強まり、他者への配慮が失われると、人間世界は殺伐として潤いのない砂漠と化する。そしてそれは人間世界だけの風景ではないのだ。近代産業社会が始まってから人類は地球上のどれほど多くの生物種を絶滅させてきたことか。そして現在、どれほど多くの絶滅危惧種が存在することか。我々の

周囲ひとつを見ても動植物相のいかに貧しく寒々としていることか。かつては田んぼを闊歩していたトキやコウノトリは言わずもがな、野にキジを目にすることももう殆どない。スズメやツバメさえ最近とみに減少が目立つ。田舎では日常の風景であったウサギ、キツネやタヌキもすっかり姿を消してしまった。子供たちに人気のカタツムリ、クワガタ、タマムシ、ホタル、あるいはメダカやドジョウもめったに目にすることはない。バッタやチョウ、トンボですらその減少ぶりは歴然としている。大抵は嫌われ者だったイタチやモグラ、あるいはヘビ、トカゲ、ヤモリなどにたまに会うと、まだ生きていたかと嬉しくなってしまう。むしろ懐かしい気さえするのである。イヌ、ネコなどのペットが愛玩されるのはその代償・補償としてであろう。この生物多様性に乏しい寒々とした世界をもたらしたのは、地球の他の隣人を顧みず、己れの欲望の満足と利益追求をこととしてきた人間中心のエゴイスティックな近代文明であることは言うまでもない。このまま進めば、SF 未来小説に見るような生氣のない死の世界が訪れるのはそれほど遠い先のことではないように思われる。

*

エゴイズムは一応自己愛と言えようが、真実の自己愛ではない。他者への配慮を欠く自己愛はどんな結果をもたらすか、今日の寒々として貧しい動物相がそれを示している。むしろ逆にエゴイズムを否定ないし制限することが世界の豊かさを保障することになるのだ。それは愛のパラドクスと同じ性質のものである。俗諺に、情けは人のためならず、と言うが、他人を愛することがまわりまわって自分を愛することになるという深遠な人生の真理を民衆は日々の生

活の中で実感したのだった。“Geteilte Freude ist doppelte Freude.”（分けもたれた喜びは倍の喜び）はドイツの諺だが、日常の論理では分ければ半分になるはずのものが逆に倍になるのはやはり愛の持つ摩訶不思議なパラドクスのせいだろう。

愛ほどエゴイスティックでかつ非エゴイスティックなものはない。愛は他者である相手を丸ごと我が物にしようとする極めて自己中心的、自己肯定的な心の動きであるが、それと同時に己れのすべてを相手に捧げたいと願う自己放擲的、自己否定的な欲望でもあることは、多くの恋愛文学の例を挙げるまでもなく、誰しも己れ自身の体験において知るところであろう。だが他者を愛することが自己を愛することにほかならないという摩訶不思議なパラドクスが成立するのはどうしてなのか。

「わたくしといふ現象は」で始まる宮沢賢治の詩集『春と修羅』の「序」の中ほどにまるで注釈のように括弧に入れた次のような個所がある。「(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに、みんなのおのおののなかのすべてですから)」⁽²⁾。宮沢賢治は熱心な法華信者であったことが知られているが、このいささか謎めいた言葉の意味を解くかと思われる一節がヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』の中に見出される。「ヨーガに専心し、一切を平等に見る人は、自己を万物に存すると認め、また万物を自己のうちに見る」⁽³⁾。すなわち私心を去って虚心に世の事物を観る者は、すべての存在の中に自分があり、また自分の中にすべての存在があることに気づく、というのである。もしそうであれば、宮沢賢治が『農民芸術概論綱要』の中で「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と言ったのは当然であった（個人の解放という近代の歩みについてもこれを敷衍して言えば、個人

の自由は人類全体の自由、それどころか生命存在全体の自由と一体でなければ実現しないことになる）。このような自他一如とも言うべき思想の証言に、ジャイナ教とガンジーの深い影響を受けたインドの思想家サティシュ・クマールの書『君あり、故に我あり』のいたるところで出会うのである⁽⁴⁾。いずれにせよ自己の中に他者がいて、他者の中に自己がいるとなれば、自他の区別はなくなり、自己愛はすなわち他者愛というパラドクスが成り立つことになる。

このような自他一如、宇宙万物の根源的一体性の思想は西洋では〈存在の連鎖〉(Chain of Being)の思想として展開されている。この思想はそのラテン語名 *scala naturae* が示すように、頂点に立つ神から最底辺の土に至る階梯として上下関係を伴う自然科学的色合いが強いのであるが、全存在間の連続性という点で右に見た東洋の思想と共通であり、ここでは両者の差異はとりあえず無視して相互に対応するものとして扱う。さて、ラヴジョイによればこの思想の系譜はプロティノス、さらにはプラトン、アリストテレスにまで遡れるようであるが⁽⁵⁾、この思想が時代に決定的な影響を与えたのは十八世紀であった。たとえば啓蒙主義者のディドロは『ダランベールの夢』の中でこう言っている。「あらゆる動物は多かれ少なかれ人間であり、あらゆる鉱物は多かれ少なかれ植物であり、あらゆる植物は多かれ少なかれ動物である」⁽⁶⁾。ここには唯物論的な響きを感じられるが、神＝自然という汎神論を唱えたスピノザ、さらには一切の被造物のうちに造物主とのアナロジーを見たヘルダーから大きな影響を受けたゲーテにあっては、この〈存在の連鎖〉の思想はたとえばこんなふうに表明される。「……そんなとき、人類はみんな合わせて初めて真の人間になるのであり、また個人は全体のうちに己れを感じる勇気を持

つときのみ喜びと幸福を覚えることができるのだ、という麗しい感情が湧いてくる」(『詩と真実』第二部第九章)⁽⁷⁾。ディドロにおいては自然科学的に捉えられていた〈存在の連鎖〉の思想はここでは精神化、社会化された形で語られている。自己完成はゲーテ青年時代の夢であったが、人類全体の完成と一体でなければ真の自己完成はあり得ないのだった。

*

全生命存在は互いに血縁関係にあり、しかも相互に依存関係にあるという認識は殆ど直観的なもので、人類の歴史の黎明期という非常に古い時代のものであったに違いない。狩猟と採集という仕方での生命に依存して生きて行かねばならなかった太古の人間は、同時にまた枯死した植物や生を終えた動物の死骸が土に還ることによって植物の栄養となり、多くの動物がまたそれを食料として生きているという生命連鎖・循環の事実から早くから気づいていたはずだ。世界の多くの神話や祭礼・習俗がそれを証言している。

エスキモーと呼ばれる極北の住民はアザラシなどの狩猟によって生きてきた。彼らは、生きるとは他の生命存在の生命を奪うことによってしか成り立たないことを、日々の生活を通して痛切に知っていた。自然に対する彼らの敬虔さはそこから来る。自然の恵みとその自然への感謝を彼らほど知る者はいない。彼らの生存のための食料となる他の生き物は自然からの贈り物なのであり、その生命を頂くことで自分の生命が成り立っているのだ。すなわち他者の生命は自分の生命となって自分の中に生き続けているのだ。と同時に、自分が他者になるとも言える。そのような生命循環の不思議な実感を、アラスカの原生

自然の中で生活した星野道夫は、自らの体験に基づいてこう吐露している。「生きる者と死者。有機物と無機物。その境とは一体どこにあるのだろうか。目の前のスープをすすれば、極北の森に生きたムース(ヘラジカ)の身体は、ゆっくりと僕の中にしみこんでゆく。その時、僕はムースになる。そして、ムースは人になる」⁽⁸⁾。

〈存在の連鎖〉は空間的なものであるとともに時間的なものである。それは端的には、生理学的には遺伝子として、また心理学的には記憶として実現しているということもできよう。それはともかく、神話やメルヘンの輪廻転生の物語に見られるような時間的な〈存在の連鎖〉は、霊魂の不滅、魂の永遠が単に慰めや願望でなく、厳粛な真理であることを保障するものである。他方また、空間的な〈存在の連鎖〉の視点からすべての存在の根源的一体性を仮定すれば、全存在の宇宙的コミュニケーションの可能性が生まれてくる。ディドロは唯物論的立場から

〈存在の連鎖〉の環に非生命の鉱物を挙げていたが、最晩年の筆者の母は路傍の石に向かって話しかけたという。その心境を推し量るまでの境地に筆者は未だ達しないが、少なくとも全生命存在の血縁関係を認識するならば、全生命間にコミュニケーションが成り立つのは道理であり、そうなれば聖フランチェスコが小鳥に向かって説教したという挿話や、あるいは東洋においてはジャイナ教の開祖マハーヴィーラ(釈迦と同一人物ともされる)が動物たちに説教したという話は毫も間違いじみた話とは言えぬことになる。仏教で「一切衆生悉有仏性」と言われるのも当然である。

*

自他の区別をせず、〈存在の連鎖〉を信じて我欲・我執を捨てれば人間は自由になれるのかもしれない。ジャイナ教では殺生戒とともに無所有が説かれるが、樽を住处としたギリシャの哲人ディオゲネスも無所有を実践することで自由の境地を享受したのである。日常の論理では財産がなければ不自由なはずなのに、その反対のことが真理として成立するのである。このパラドクシカルな真理を説く民間説話は洋の東西を問わず、枚挙に遑がないほどで、グリム童話集第八三番『幸福なハンス』は我がわらしべ長者と反対に、初めに給金として貰った黄金の塊が繰り返されたマイナス交換の末に砥石一つに変わり、それを誤って井戸に落としてしまったとき、主人公ハンスはやっと重荷から解放されて喜びに満ちて母のもとに帰って行く⁽⁹⁾。ラ・フォンテーヌの寓話第八巻第二話『靴直しと金融家』では、陽気な働き者の靴屋が隣人の金貸しから大金を貸し与えられた結果、お金の心配で歌と元気を失ってしまうのだが、お金を返してしまうことで元の歌と元気を取り戻す⁽¹⁰⁾。これと殆ど同趣向の話は中国昔話にも見える⁽¹¹⁾。またわが国の落語『水屋の富』では、貧乏長屋に住む水屋に富くじ千両が当たり、盗まれやしないか心配でおちおちできぬ日々の末に、床下に隠しておいたお金を向かいの男に気づかれ、とうとう盗まれてしまうのだが、「おや、だれか金を盗んだな……ああ、これで苦労がなくなった」という下げで終るのである⁽¹²⁾。

「地上に宝を積んではならない。天に宝を積みなさい。あなたの宝のあるところに心もあるからである」(新約聖書マタイ 6 - 19 以下)。ほんとうはエゴイズムを去り、無所有、無執着になるのが一番いいのかもしれない。そうすればまさに野の百合(マタイ 6 - 28) のようになにも思い煩うことのない自由

の境地が訪れるのかもしれない。だがそれは我ら凡俗には困難だし、あまりにも現実離れした話だろう。だが、エゴイズム、我欲を完全に捨て去ることはできぬにしても、せめてそれを抑制し、制限することはできよう。すなわちシェアーの精神である。自他一如、〈存在の連鎖〉の認識のもとでは与えることは得ること、己れを殺すことは生かすことなのだった。今回の原発事故は、巨大技術の問題性を抉り出し「スモール・イズ・ビューティフル」を唱えたシューマッハーの慧眼をはからずも実証した。これまでのように量を増やすことに狂奔するのではなく、質を高めることに価値基準を根本的に転換しなければならないのだ。エゴイスティックな競争でなく、平和な共生の社会に変えなければならない。自己制限とシェアーの叡智を今実践しなければ人類の存続は危ういであろう。

注

- (1) 『時代の思想の転換とともに—尾関周二教授退官記念論集』(尾関周二教授退官記念論集編集委員会, 2012 年 3 月) に『魔法使いの弟子』の拙訳がある。
- (2) 宮沢賢治『宮沢賢治全集 I』ちくま文庫, 1986 年, 16 頁。
- (3) 上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』第 6 章 29, 岩波文庫, 1992 年, 66 頁。
- (4) サティシュ・クマール『君あり、故に我あり』(尾関修・尾関沢人訳), 講談社学術文庫, 2005 年。
- (5) ラヴジョイ『存在の大きな連鎖』(内藤健二訳) 講談社学術文庫, 2013 年。なお、パトリディーズ, ボアズ, フォルミガリ『存在の連鎖』(村岡晋一他訳) 平凡社, 1987 年, をも参照。
- (6) ディドロ『タランベールの夢』(新村猛訳) 岩波

文庫，1958年，52頁。

(7)Goethes Werke, Bd.9, Hamburger Ausgabe,
1967, S.387.

(8)星野道夫『イニユニック』新潮社，1993年，
112頁。

(9)『グリム童話集』（金田鬼一訳）岩波文庫，1954
年，第4冊，9頁以下。

(10)ラ・フォンテーヌ『寓話（下）』（今野一男訳），
岩波文庫，1972年，76頁以下。

(11)『中国昔話集 2』（馬場英子他編訳）東洋文庫，
平凡社，2007年，259頁以下，「金は苦しみの素」。

(12)興津要編『古典落語・続々々』講談社学術文庫，
1973年，246頁。

木下 康光（同志社大学名誉教授）